

「ムーゼルマン」の傍らにおける「倫理」と「連帯」は「喩」として表象可能か

— 「現代詩論史」の視角から吉本隆明『「反核」異論』を読む —

柳瀬善治

はじめに

吉本隆明『「反核」異論』（深夜叢書社 一九八二・一二）をめぐ
る当時の言説や研究史については、本号の加島論文、村上論文に
譲るとして、本稿では『「反核」異論』と同時代の「詩」をめぐ
る言説との対応や吉本の仕事全体のなかでの位置づけを試み、そ
のうえで二〇一九年におけるこの書物の「原爆文学研究」として
の意義を問い直したい。

一 『「反核」異論』をめぐるコンテキスト
— その運動論批判としての限界 —

『「反核」異論』に収められた鮎川信夫との対談「崩壊の検証 —
「反核」をめぐる〈戦後〉理念の終焉 —」は、『現代詩手帖』
一九八二年八月号に掲載された。冒頭には八二年六月に亡くなっ
た西脇順三郎をめぐる二人の評価が語られ、鮎川は「少なくとも
高村は戦争詩を書いたけど西脇は書かなかつたなんて言う次元で
優劣をつけたくない」^①としている。これはその後の対話での「反
核運動」の倫理性の評価へとつながる発言である。鮎川の現代の
詩人が「現代そのものから追い詰められている」^②という発言を

受けて吉本は「反核運動」を「中から追い詰められている」「現代というものからの圧迫にこらえきれなくなった部分が大きいにある」⁽⁸⁾と述べている。そして吉本は「一種の核という宗教運動」とみなし、「正統左翼」を「とうとうこれで終わりか」と断じている⁽⁹⁾。

しかしながら、政治的運動体や国際政治の問題に對しての鮎川・吉本のその段階での認識の不十分さ・甘さを論難することはいたつたやすい。旧西ドイツの反核運動の切実さについては若尾祐司や竹本真希子、ヨアヒム・ラートカウらの研究にあるように⁽⁵⁾、当時NATOの「二重決定（追加軍備）」により対ソ連の中間距離核ミサイルとパーシングII型ミサイルが西ドイツに配備されており⁽⁶⁾、東西陣営の間で核戦争が勃発した場合真っ先に標的にされる西ドイツではその切実さが日本とはまるで違うのであり（これは当然日本の反核運動にも跳ね返る観点である）、そうした文脈の違いを抜きにして一概に日本での運動と一緒に語ることはできない。

ポーランドの「連帯」についても、吉本は当時手に入る日本での報道や研究文献に可能な限り目を通したうえで論を運び、「連帯」を「開かれる」国家」を目指したものとし、その労働組合の水準から国家装置への段階を埋めるロジックがないという「限界」を承知したうえで、「史上一番遠くまでいった」運動として評価しているが、ポーランドの「連帯」「体制転換」の帰趨が見えてしまった二〇一九年の段階では、この吉本の議論もまた歴史的なものとして扱わねばならない⁽⁷⁾。

更に今日の目から見て大いに問題なのは、吉本の反核運動への批判として有効だと見なされてきた部分、（アメリカの核兵器増強にばかり批判を行いソ連の核軍備増強には目もくれない）という批判が、当時の日本青年協議会（現在の日本会議）の主張とほぼ一致している点である。

日本青年協議会は八〇年代に江藤淳や清水幾太郎に機関誌『祖国と青年』への論考を依頼しているが⁽⁸⁾、清水は八一年一〇月一〇日の西ドイツのボンでの反核集会のルポを『祖国と青年』五六号（八二年二月号）に寄せており、ここでは当時のアメリカ国務長官ヘイグの演説を引く形でソ連の核配備に言及しない平和運動の「ダブルスタンダード」を批判し、東ドイツの新聞（共産党機関紙『ノイエス・ドイッチュランド』）の論調を参照し「東側の新聞が、こういう論調であるなら、一〇月一〇日のデモは東側にとつて有利なものだろう」と述べておりはつきりとしたこうした運動への違和感が表明されている⁽⁹⁾。そして、『祖国と青年』五八号（八二年五月号）では、「反核」狂騒曲「反核」をめぐる左翼論壇の悲喜劇」として編集部による日本の論調のまとめがなされ、ほかならぬ吉本の三浦雅士による『平凡パンチ』八二年四月一二日号のインタビュー「現代と若者」（『反核』異論）に収録された対談）が『週刊読書人』四月一九日号コラム「紙てつぼう」の引用という形で「反核運動」を揶揄するものとして引用されている⁽¹⁰⁾。

広島での反核運動の担い手の一人であった森瀧史郎はこの時期のボンでの集会（清水の参加したのとは別の十一月二日の集会）に参加しており、その経緯は『ヨーロッパ反核七九——八二・生

きるための選択』に寄せた森瀧の文章⁽¹¹⁾で確認できるが、この時期、西ドイツの「反核運動」という（事件）を合わせ鏡にして吉本、森瀧、清水が向かい合っている点が興味深いと同時に、『試行』『現代詩手帖』『祖国と青年』が政治的に同一方向を向いてしまっているのが実に皮肉であると言えよう⁽¹²⁾。

つまり、これまで吉本の左派陣営への効果的な批判として一定の評価をなされてきた論点⁽¹³⁾は、同時代の日本青年協議会の「歴史戦」を補強するものとしてあつまり取り込まれ、彼らの思想と共振してそれを強化してしまっているのである。二〇一九年現在の「日本会議的」な思想が政界をはじめ日本中を覆いつつある地点から見返したとき、吉本の発言のこの無自覚な共振ぶりはほとんど致命的である。吉本自身が「現在と」いう作者⁽¹⁴⁾、「修辭的な現在」⁽¹⁵⁾という概念で個人の限定された認識を超えた同時代の構造的な言説の編成力を問題化している（そもそもそうした論理構成で『反核』異論』は彼の論敵を論難しているのであるから）以上、この問題に対して「当時は気が付かなかつた」という言い逃れは全く通用しない⁽¹⁶⁾。「政治家は決して文学者より馬鹿じゃないよ」という鮎川の発言⁽¹⁷⁾もこれもまた現在での日本を取り巻く国際政治の文脈や日本の国内政治の現状を知る立場から見ると歴史的な限界を持つ発言としか言いようのないものになってしまっている⁽¹⁸⁾。

ただ、ここでの議論に若干の留保をつけておくべきなのは、鮎川も吉本も「実体」として存在する核兵器・原子力発電所とそれを生み出した核融合という「知識」とを区別して考えていること

である。

鮎川 知識や科学技術っていうものは元に戻すっていうことはできませんからね。どんなに退廃的であろうが否定はできないんですよ⁽¹⁹⁾。

制度としての核兵器や原子力発電所をたとえ廃絶したとしても、そうした諸制度を生み出した「知識」自体をリセットして消去することは誰にもできない、だから完全な意味での核廃絶は不可能なのだというのが吉本と鮎川の認識である。鮎川の「核兵器を作っちゃったというのは既に原罪みたいなものなんだよ」⁽²⁰⁾という発言がそのスタンスを端的に表している。この観点は、吉本の三・一一の原発事故以後の「もつとも根本的には、人間ばかりでなく生物の皮膚や骨を構成する組織を簡単に透過する素粒子や放射線を見出して、物質を細かく解体するまで文明や科学が進んでそういうものを使わざるを得ないところまでできてしまったことが根本の問題だと思えます」「そのことを覚悟して、それを利用する方法、その危険を防ぎ禁止する方法をとことんまで考えることを人間に要求するようになってしまった。」⁽²¹⁾という発想につながっている。

この点を重視した瀬尾育生は、吉本の『反「原発」異論』での議論を丁寧を追ったうえで「この本の主張の第一の核心は何かといえば、技術の必然性の中に倫理を介入させてはならない」ことだとする。それは「廃絶ということが引き起こす思考の連鎖が、人々の思想領域のすべてに及ぼす目に見えない損傷や倒錯があ

る」からであり、「とりわけ核技術は、その超効率性のゆえに、核技術そのものを高度化することによってしか克服されえないということ」「技術の必然性に倫理を介入させようとしている運動が持つ錯誤や宗教性を、思想そのものとの問題として克服する」⁽²²⁾事が吉本の主張の核心であるとす。

吉本は一九八九年の「情況への発言」⁽²³⁾において、大前研一が書いた『加算混合の発想』での「原子炉安全論」を援用し、「ソ連原発事故のようなものは確率論的にはあと半世紀は事故を起こらない」だろうという予測を立てたが⁽²⁴⁾、その予測は二二年後の福島原発事故で完全に外れており、瀬尾育生の技術の現場での「可誤的なもの」⁽²⁵⁾「技術というものがそうであるのと同じように、事後的に語られる正解・不正解、事後的に語られる責任・非責任が、決して発言権を持たないような思想の現場性」があり、それを「自然的過程」として擁護しようとする議論⁽²⁶⁾は、これ自体が「倫理」や「政治」の領域と理性が介入できない「物質」の領域とを混同して「責任」という問いを回避するものであり、いわば「原発事故は予見不可能だったから責任は問えない」と言っているのと同じでありにも不用意だという論難を免れ得まい。⁽²⁷⁾

吉本は反原発運動に関しても、山本啓を論難する形で、「核」廃棄放射能物質が「終末」生成物などというたわけ果てた迷妄が、科学の世界をまかり通れるはずがない」「半衰期がどんな長かろうと短かろうと、放射性物質の宇宙廃棄（還元）は、原理的には全く自在なのだ」と断じたが⁽²⁸⁾、これも福島原発事故以後に続出した「中立的（実際は冷笑系）な理系」の論理そのものであり⁽²⁹⁾、これが

チエルノブイリ原発事故以前の言説であることを考慮しても、批判は免れ得ないだろう（吉本がチエルノブイリ原発事故によっても福島第一原発事故によっても全くスタンスを変えなかったことは先に見たとおりである）。

原発事故で移住を余儀なくされた、あるいは健康被害を受けた人間もまた吉本の言う「大衆」であり、三・一一以後、日本の国家装置がいわば暴走し、弱者を切り捨てる傾向が強まっている現状から考えて吉本の発言はいわばこうした人々を切り捨てる効果しか生まない。また甲状腺がんの診断基準の例に見られるように科学的判断に「政治」や「倫理」が介入することでその判断にブレが生じることもまた事実であり、何よりも原発の建設と維持の基準それ自体が「科学」の公準に従っているとは言えない「政治」的な判断の上に載っているものだからである⁽³⁰⁾。

二 無根拠な「倫理」への批判と「シンボル」の変換

ただし、吉本のこうした姿勢、根拠なき「倫理」を行動原理として提出する言説への仮借ない批判の姿勢は初期から一貫している。『高村光太郎』では高村光太郎の「一億の号泣」についてこのように批判している。

わたしが徹底的な衝撃を受け、生きることも死ぬこともできない精神状態に落ち込んだとき、「鋼鉄の武器を失える時、精神の武器おのずから強からんとす。真と美と到らざるなき我等が未来の文化こそ必ずこの号泣を母胎として其の形相を

孕まん」という希望的なコトバを見出せる精神構造が、合点がゆかなかつたのである⁽³¹⁾。

『「反核」異論』での政治的場面での倫理性を前面に押し出す署名賛成側への激烈な批判、具体的には「どうしてかれらは（いなわたしたちは）非難の余地がない場所で語られる正義や倫理が、欠陥と障害の表出であり、皮膚のすぐ裏側のところで亀裂している退廃と停滞への加担だという文学の本質的な感受性から逃れて行ってしまうのだろうか？ かれらを（わたしたちを）古き懐かしき日々への回想でしかない思想の図式的な光景へゆかせる退化した衝動が、現在、倫理の仮象をもってあらわれるのはどうしてなのだろう？」⁽³²⁾とする、根拠なき「倫理」を行動原理として提出する言説への仮借なき批判の姿勢は吉本のなかでは若いころから一貫しており、瀬尾はこれを「著者の科学技術についての思考の、六十年以上にわたる驚くべき一貫性」⁽³³⁾だと述べている。

また、吉本は「ぼくはそれに関連して核兵器の出現は、世界革命も世界戦争も不可能な時代にさせたと書いたことがあります。今も基本的には世界革命というような全面的な革命も不可能だし、世界核戦争、少なくとも核全面戦争は不可能だと思います。」
「空想的理念的に言えば、軍備、戦争というものは全部根源的に否定の対象なんです。」⁽³⁴⁾という認識をかなり早いうちから持っていた。

この吉本の認識は、晩年の三島が核兵器について述べた認識とつながりうるものである。三島もまた「核兵器は使えない兵器」

だという認識をもち、そこから政治における「シンボリックな意味」の変容が起こったとする。

こういう世の中にしたのは、どうも核が原因じゃないかと思えるんです。というのは、国家権力でも何でも、権力というのは力ですから、「カイコール兵器」で、兵隊の数と強い兵器を持つているほうが強い。（略）いままでは兵器が使えるからこそ強かったんです。ところが使えない兵器をついつくつちやっただんですね。広島で使ったあんな惨禍を起こして使えなくしてしまっただ。使えない兵器というのは、あるいは力というのは恫喝にしか用をなさない。恫喝ないしは心理的恐怖、ひとつのシンボリックな意味だけが強まってきた。そうなると、片一方のほうは使えぬ兵器に対するものとして人民戦争理論みたいに、ずっと下の方からしみこんでくるやつが出てくるのは当然ですね。それを見て被害者意識というのがだんだん勝つ力になってくる。⁽³⁵⁾

三島は、核抑止力を「シンボリック」なものとしてとらえ、それが現実での力の行使を抑え、核の力のシンボル化と「人民戦争理論（＝人民戦線路線）」（これを「被害者意識」による「連帯」を誘発するものだと考える）とを対応したものととらえており、これは『文化防衛論』でも援用されたロジックである。

このやうなターニング・ポイントは、実はヴィエトナム戦争によつて長期間に養成されたものであつた。すなはち、ヴ

イェトナム戦争への感傷的人道主義的同情は、民族主義とインターナショナルイズムの癒着を無意識のうちに醸成し、反政府的感情とこれが結合して、一つの類推を完成させた。類推とは、他民族の自立感情に対する感情移入を以て、自民族の自立感情のフラストレーションの解決をはかるといふ代償行為である。⁽³⁶⁾

大島渚との対談「ファシストか革命家か」において、三島は全学連の政治行為をマスコミを意識した後世へのアリバイ作り、つまり「表現行為」（これは政治行為が実在の制度——三島が言うところの「ファクト」——との接続を失い表象でしかなかったことを意味する）でしかないと批判する⁽³⁷⁾。これは『文化防衛論』で「エントプライズの寄港と全学連の基地侵入といふ一連の象徴的行為」と呼ばれたものと同様のものであり、大文字の他者である象徴秩序が失効したのち、すべての行為がいわば小文字の秩序として象徴化するという逆説がここで起るのである⁽³⁸⁾。

三島が六〇年代後半に指摘していた「核の使用不可能」による「政治的行為の象徴化」「被害者意識による「連帯」の観念の浮上」という問いを、いわば八〇年代初頭に反核運動に対して差し向けたのが吉本・鮎川の「反核運動」批判であるということが出来る⁽³⁹⁾。吉本は八〇年代前半を「とても重要なシンボルの転換点」⁽⁴⁰⁾ だとしたのだが、「シンボルの転換点」は実際には六〇年代後半に、つまり吉本が『共同幻想論』を書き、三島が『文化防衛論』を書いていた時期（一九六八）にすでに始まっていたのだと言える⁽⁴¹⁾。そこでは、共同性と幻想と文学的修辭とが現代（情報／核）社会と衝突

し解体する寸前にいったい何が起るのかが問われていたのである⁽⁴²⁾。

三 吉本における「死」という主題と「世界視線」

「倫理性という装いのもとにシンボルが逆転」するという問いは、詩論における「喩」の問いへとつながっていく。この時期に吉本が詩作を再開し、イメージ論や比喩論を精力的に考察し始めたのは、そうした「シンボル性」をめぐる問題意識とも連動している。

八〇年代の吉本の仕事としては『空虚としての主題』『マス・イメージ論』『ハイ・イメージ論』などで展開された一連の消費社会論とイメージ論が連想されるが、それらの仕事の背後に別の主題を見出している批評家は何名か存在する。

三浦雅士は『死の視線 八〇年代文学の断面』で「死の視線」「神の視線」という問いを立てて、石原慎太郎や古井由吉をそうした視点で分析している（三浦の著作はもともとは『海燕』に連載された文芸時評である）が、その書物の最終章は吉本論であり、三浦は吉本の八〇年代の仕事を「ハバーマスからリオタールへと広がる現代の高度情報化社会論の揺れに対応」させながらも、二人から吉本を分かちのが「現代とは何かという問いで提起されているのは、少なくとも吉本隆明においては、死という問題意識にほかならないのである。そして、このことについてある程度意識的になった瞬間に、現在に対する視線の変化がおとずれたのだ」⁽⁴³⁾ としている。

三浦の指摘で重要なのは、その「死」をめぐる問題意識が八〇年代の吉本の批評に「視線の変化」をもたらしたという点である。

具体的には一九八二年の『マス・イメージ論』における吉本の論点、ポオの推理小説に見られる「もう一つの不可視の視線」が「他界からの視線、死の視線を感じさせる」と指摘していることである。⁽⁴⁴⁾ その翌年一九八三年の宮沢賢治と親鸞についての講演では、よりはっきりと死への言及があり、「善悪の彼岸ともいいうべき倫理的な中性点を通過するその場面が、他界からの視線、死の視線が放射される場面と一致している」⁽⁴⁵⁾ とする。

そして、より興味深いのは、三浦の指摘にあるように、この二つの講演の直後に吉本が書いた柳田国男論では、柳田は「渦巻の内壁を、鳥瞰する位置から見たり、渦の粟粒まで見えるほど接近した位置から視ている、もう一つの自在な眼を所有した存在」として、つまりはポオと同様の視線を持った存在として位置付けられていること⁽⁴⁶⁾、さらにこの視線と同様の「死の視線の所有者」が現在のファッションデザイナーやコンピュータ・グラフィックスに見出されていることである⁽⁴⁷⁾。

この三浦の指摘を受けた上で、神山睦美は「はるか遠くから差し込む視線は、自己というものにまとわりついているものを次々に微分化することによって、おのずから死後と未生以前を往還することを可能にするということ」とまとめ、それが吉本の言う「世界視線」であるとしている⁽⁴⁸⁾。

「死後と未生以前を往還することを可能にする」視線とは、三・一以後の文学作品を論じた中で以前私が問題化した「〈未生〉の声」「死者の声」を聞き取ろうとする構えがいわば先取りされ

ていると言える⁽⁴⁹⁾。

つまり、さきにみた『ミル・プラトー』の「平滑空間」を、「空隙」＝「無数の人々ともとのが無数の出来事に巻き込まれ、さらに無数の出来事を誘発しながら予測不可能な展開をつづける「経験の場所」としてとらえ、さらにそこに、「いまだ生まれしていない」者たちの声、「人間以前、物質以前の振動」「情動的な感情」でしかないような「〈未生〉の声」「死者の声」を聞き取り、それらの声を「形象として出現」させ、さらに「形象がいわば倫理的な組織として出現する」可能性を探ること、そうすることで「未聞の創造様態」「可能な未来世界を「先取りする啓発」を生み出すことである。⁽⁵⁰⁾

その世界（川上弘美『神様二〇一一』の世界——引用者注）は、「一つの世界だけを見ていながら、同時に、その世界に重なるように、震えて、微かに存在しているもう一つの世界」であり、そうした世界を読み、また描くことが三・一以後の文学に必要とされるのである。⁽⁵¹⁾

三・一一の直後のインタビューでも吉本はいわゆる「脱原発」に冷淡だが⁽⁵²⁾、吉本の理論の中には、三・一一以後の文学やそれへの解釈をいわば先取りする論理が存在する。政治的な発言においては反核や原発を拒絶していたとしても、いわば吉本の批評家としての「生理」が、そうした事態に対し理論的に的確に反応させたと言えるだろうか。原子力が人間の理性や感性、身体に突

き付けた問い、「放射能核種の半減期が数万年単位であり、「人間の歴史認識能力を超えてしまっている」ということ」「つまり今後、文学も思想もこれまでの時間性では処理できない巨大な問いを問わなければならないとなった」⁽⁵³⁾ことを吉本は実は正確に理解している。三浦は吉本の『マス・イメージ論』の「解体論」の大江健三郎を論じた一節に次の文章があることを指摘している。

原子や分子はどういじつても救済になりえない。(死)への関門の意味が問われることの中にしか、救済は本来的に存在しないからだ。⁽⁵⁴⁾

この論が一九八二年九月の『海燕』が初出であること、言及対象が大江健三郎であるということを考え合わせても、明らかにこの一節は「反核運動」を意識したものである。『「反核」異論』に『マス・イメージ論』の「停滞論」が収録されていることを考えても二つの論考の対応関係は明らかだろう。そしてこの発言は、「もつとも根本的には、人間ばかりでなく生物の皮膚や骨を構成する組織を簡単に透過する素粒子や放射線を見出して、物質を細かく解体するまで文明や科学が進んでそういうものを使わざるを得ないところまでできてしまったこと」を認識したうえで、「原子力」から直接的に「倫理」を導出することはできないという吉本の認識があらわれていると言える。

また、この時期に吉本は『野生時代』に詩を連載している。ここでの詩の主題が「死」をめぐるっていることは神山が指摘してい

るが、もう一つ、菅谷規矩雄の指摘にあるようにそこで「天草」が扱われていることである。「九州天草の島が、吉本隆明の父祖の地なのであつてみれば、天草が吉本隆明の死の主題となることには、ひとつの必然があるといえる。」⁽⁵⁵⁾

菅谷は吉本の連作詩編の二七から三二までを「天草シリーズ」と名付け、「骨、灰、遺骨、骨壺、墓石」という語が頻出するその詩編のモチーフを「納骨の旅」だとしている。⁽⁵⁶⁾

技法的には「各シーンは、あたうかぎり映像的に自在に転換する」ように表象され、これは「自らの近代の原型、家族史の(出自)を、在地か離郷か放浪かという三つの類型」しかもたない「わたしたち」が「それを無意味化し」「往路が帰着であり、復路が立出である」という形に再編し直すためのものである。⁽⁵⁷⁾この発想が先に見た「おのずから死後と未生以前を往還すること」を可能にする「世界視線」に対応していることを理解するのはたやすい。⁽⁵⁸⁾

ここで浮上する疑問は、当時の吉本が、「死」を組み込んだ視線、「世界視線」を科学技術と連動させて問題化し、かつ「天草」という土地を詩の主題として選びながら、なぜか長崎の原爆のことについて一切言及していないことである。⁽⁵⁹⁾『「反核」異論」を記し、反原発運動を否定しながらも、吉本の理論と詩作品は、「原爆文学」と接続可能なヴィジョンを提出していたのであり、この吉本と「原爆文学」との「空隙」を埋めるところから『「反核」異論』再読は始められなければならない。

四 戦後詩における「死者」の主題の諸相 その断層について

ただし、戦後詩の歴史において、「死者」というのは吉本に限らず多くの詩人が抱えていた主題である⁽⁶⁰⁾。

そうした代表として『幻夜の渴き』で六〇年代の詩人論として「死者の方法」を書いた北川透と『死者たちの群がる光景』などの作品で死者を表象し続けた入沢康夫をあげることができ、神山睦美は『成熟の表情——現代詩人論』でこの二人を論じている⁽⁶¹⁾。

神山は北川の「死者の方法」の「沈黙と拡散というおのれの内なる闇と外なる闇に対する二重のたたかきを通じて、地上的な秩序の呪縛を超えた極地から、わたしたちの世界のかくされたリアリティを見出すまなざしを仮構することのうちにある」⁽⁶²⁾とする文をうけてそこで提出されているのは「言葉にとつて不可能性そのものである〈死〉に拮抗して仮構の意志をきわだたせていくところに〈詩〉の根源的な自由が試されるという認識」だとする⁽⁶³⁾。

神山の読解が秀逸なのは、入沢と北川の「死者」の表象を岩成達也の詩とともに論じていることである。『レオナルドの船に関する断片補足』の「法華寺にて」を神山は「北川の提起した〈死者の方法〉なる視座に包摂されるようにみえながら、微妙な逸脱を内に秘めたものとして」ととらえている⁽⁶⁴⁾。神山の論では岩成の作品における〈死〉と〈死者〉との間のずれが問題とされている。

抽象的かつ幾何学的空間として「死後の世界」を描き出す岩成の詩は死者の表象を支える「受苦—情熱」を持たない「この世界へ

の否認の完璧性」として読解がなされる⁽⁶⁵⁾。そして〈死〉を「この世界の関係の喩」としてではなく「あらかじめ関係を遮断するところにあらわれ出るひとつの〈空間〉とみなされている」⁽⁶⁶⁾点に入沢と岩成の共通性を見るのである⁽⁶⁷⁾。

この「死者」の主題は入沢においては八〇年代の仕事においても持続的に現れる。入沢の『死者たちの群がる光景』について、菅谷規矩雄は『詩とメタファ』で「不在に充ちみちた現在」の「社会の帰属しえぬことば」が「入沢康夫の詩の核心」であり、現在は「レトリックが究極の喩を目指して思想を語りはじめる」時代なのだとして述べている⁽⁶⁸⁾。

先に、『反核』異論』の吉本・鮎川対談が『現代詩手帖』での発言で、西脇順三郎の死への言及から始まっていると述べたが、当時の詩壇ではこの節で言及した詩評論や詩集が次々に刊行されて話題をさらっており、『現代詩手帖』は八二年一月号に「詩はこれでいいのか」という討論会を組む(吉本はその討論会で「若い現代詩」と題する講演会を行っている)⁽⁶⁹⁾、北川透は『現代詩前線』にその後まとめられる詩の時評を書いている⁽⁷⁰⁾。

北川の『荒地』論の最終章に当たるのは「比喩」論であり、『現代詩手帖』の同じ号(一九八二年一〇月号)に掲載された菅谷の「たとえ話(パラブルの魔)」もまた比喩をめぐるものであり、菅谷は戦後詩における「メタファの分解」を論じている⁽⁷¹⁾。

そして、菅谷の示唆によれば、吉本の当時の詩作品においても、「喩」が、「詩的言語体」から「劇的言語体」へと転移し、さらにその解体(悲劇の解体)へと導かれている様子が読み取れる(菅谷はそれを吉本のいう「修辭的な現在」の彼方」であるとすると)⁽⁷²⁾。

先の入沢の詩をめぐる「レトリックが究極の喩を指して思想を語りはじめる」時代という菅谷の状況診断もこれと対応しており、詩が従来のレトリックやメタファーというかたちでは表象されえなくなつた時代であるという時代認識が当時の詩人たちに共有されていたということになる⁽⁷³⁾。それが吉本と鮎川の言う詩人たちが「現代そのものから追い詰められている」という指摘の具体的な表徴である。吉本の『「反核」異論』での議論は彼自身の他の仕事を背景に持つだけでなく、こうした詩壇の動向をも射程として含んでいるのであり、そうした文脈を理解しないと本書の正確な理解はおぼつかない。

いわばそれは八〇年代前半の詩人が直面していた（詩作を困難にする）「現在」、吉本が言う（個々人の意志を超えた形で詩を構造的に規定する言説編成としての）「修辞」、そしてその修辞によつては表象されない裂け目の露呈としての）「修辭的な現在」とそれまでの戦後の詩人たちが抱えてきた「死者の表象（の不可能）」という主題とが交錯したことから生まれる困難さであると言えよう。そこから神山の言う「死」と「死者」との間のずれ、北川の言う「死に拮抗する仮構の意志」もよりはつきりとした形で顕在化してくるのであり、吉本の八〇年代の「世界視線」「修辭的な現在」の問題意識はそうした「ずれ」を表象し得る「仮構」——詩論としては（喩）の概念自体がどれだけ拡大あるいは変容に堪えうるか⁽⁷⁴⁾、という問い、そして死者論としては「死後と未生前を往還することを可能にする視線をいかにして獲得するか」という問い⁽⁷⁵⁾、として顕在化する——をいかにして構築するかに賭けられていたといつてよい。

ここで問題とされる「死」と「死者」のずれは、いわば表象不能な「死」と「死の表象」との間のずれとして再構成し得るだろうが、北川の言う「死に拮抗する仮構の意志」とどのように関係するかにについては、戦後の小林秀雄の仕事とその補助線とすることができると。小林が一九四九年に書いた不気味なテクスト、「死体写真或いは死体について」がその格好の例証である。

子供をおぶつた女の人が、写真を見ながら、ホーラ、絞殺されたんだよ、絞殺されたんだよ、と背中の子供の尻を叩いている。彼女の顔には何んの表情も現れておらず、目はうつろの様であった。（略）犯行者は死体を見ない。犯行という行為が、死体の異形をかくす。戦争という大きな行為の陰に何と沢山の死体が隠れてしまったか。帰還兵は、一人として死体の印象を正確に語り得ないはずである。（略）死体の無意味さが、私の心を無意味にした。私の記憶は、あれはたしかに死体であつたという言葉の周りをうろつく。そして其処に何かしら感情が生まれてくることに気づく。あの時、私の心が乾板であつたなら、死体写真が撮られていたはずである。写真というものはそういうことをする。（略）写真は何も表現しない。Expression という言葉を、その本来の意味、物を押しつぶして中身を出すという意味にとるならば⁽⁷⁶⁾。

ここでは、戦争と「死体」へのこだわり、そしてなによりも、「死体の異形」と「表現」Expression からの余剰が語られている。戦後の小林はこの「死」と「死の表象」との間のずれを絶えず問

題とし、それをいかにして己のエクリチュールに組み込むかを問
い続けたのだと言ってよい（吉本の「世界視線」に対応するものは
「キリスト」、山城むつみの言う「力動的な起伏」を持つ小林の「書記
行為のただなか」において、「幻として出現させる」他ないものとして
の「キリスト」であろう⁽⁷⁷⁾）。

小林の作品がしばしば行う歴史や物語のただなかに、一気に読
者を連れ込むためにしつらえた舞台装置の過剰な演出、島弘之が
『感想』というジャンル⁽⁷⁸⁾と呼ぶ道具立ては、「死に拮抗する
仮構の意志」として捉え直されねばならない。

そして入沢と岩成の作品が示した「死」をめぐる表象の微妙な
ずれすらも小林の戦後の文業に含まれていたのであり、六〇年代
以降の現代詩の「死」という主題をめぐる様々な試みは小林の戦
後の仕事のいわば意図せざる再演であつたとすらいえる⁽⁷⁹⁾。いや、
鮎川の「遺言執行人」「死んだ男」を端緒として開始された「戦
後詩」の営為自体が「死」と「死の表象」のずれをつねに問題化
し続けたのだと云えるのかもしれない⁽⁸⁰⁾。

酒井直樹は田村隆一の『一九四〇年代・夏』を論じた論の中で、
「この詩人は自分の言表位置をつねに移動させており、その結果
として彼は単一の統一的な声を持つことができないということであ
る。」「死は、表現対象と表現行為との間にあると想像される呼
応関係がこわれる瞬間に到達するわけである。」と述べている⁽⁸¹⁾。
酒井が田村の詩について述べている「死」をめぐる言表位置の移
動、ずれは、酒井自身が示唆しているように、戦後派の詩全体に
言いうるものである⁽⁸²⁾。

そうした複雑な発話する人称の移動によって浮上するもの、そ

れが「死」と「死の表象」のずれの埋めようもない断層であり、
この断層はいわば小林・鮎川の時代から決して埋まることなく裂
け目を開けており、それが『死の灰詩集』論争・『反核』異論
論争、湾岸戦争と詩人をめぐる論争などを契機として絶えずその
時代のコンテクストを含みこみつつ再演され続けるのである⁽⁸³⁾。

五 「ムーゼルマン」の傍らにおける「倫理」と「連帯」は

「喩」として表象可能か

そして、「死」と「死の表象」のずれが顕在化したとき、「死」
をめぐる「倫理」の問題が、そのずれに基づく裂け目を隠べいす
るものなのか、それとも裂け目に誠実に向かい合うものなのか、
改めて問われるのだと言ってよい。

先に述べた吉本の極限状態での「倫理」の是非を問う姿勢を現
在の哲学の知見を借りて別の形で言い換えてみたい。

大澤真幸はジョルジュ・アガンベンの「ムーゼルマン」（強制
収容所においてあらゆる動物的反応を失い生ける屍のようになってし
まったユダヤ人収容者）についての議論を参照しながら、通常の
カント流の定言命法——「行為の倫理的な価値は、結果とは独立
に判断されなくてはならない」——が極限状態では成立しないと
述べている。

強制収容所の過酷な環境の中で、生ける屍にまでなってしまう
った人に対して、「私のようにしやんとしなさい」と言った
り、「俺のように威厳を保て」ということを態度で示したと

すれば、これほどおぞましいことは他にないだろう。誰でも、ムーゼルマンのような状態にまで追い込まれば、威厳など保てないことは明らかだからである。ムーゼルマンの現前は、倫理の全体を停止させてしまう。言い換えれば、カントの定言命法に代表されるような倫理が維持されるためには、ムーゼルマンから目を背けるしかないことになる。⁽⁸⁴⁾

この大澤の所論を補助線として、先に見た吉本の「倫理」を技術の現場に介入させることを拒む姿勢、さらには極限状態で前向きな「倫理」を説く言説への吉本の根本的な違和感を原爆文学に差し向けるものとして再構成したらこのようなテーゼになるであろう。

つまり、「定言命法的な「倫理」を表現に先行させた「反核運動」や「原爆文学」は「爆心地の黒焦げの死者の傍らで倫理的な尊厳と代理の言葉を説く」と同じくらい滑稽で猥褻な行為だ(つまり、「ムーゼルマン」問題と論理的に同じ)」というのが吉本の主張なのだということである。この主張は、死者の代行＝遺言執行者は可能なのかという鮎川の(そして小林秀雄の)問い、そして戦後詩の「死者」をめぐる問いとも反響している。

これとは反対に「その滑稽さをあえて全面的に引き受けた狂気と紙一重の倫理に賭けること」こそが大田洋子や栗原貞子に代表される「原爆文学」の営為であることとあえずまとめることができる。

そして、石原と栗原が提出した問い、「極限状態での「倫理」と「政治」の拮抗の上に「連帯」の論理をどのように組み上げる

ことができるのか」という問いは、川口隆行が『原爆文学という問題領域』で俎上に上げた問いである。川口は石原が提起した「被害者の集団の中で少しでも長く生きのびるために、ひとりの被害者が他の被害者になにをしたのか」という問いをどのように原爆文学が受け止めるべきか、「政治的告発を断念し、体験の共約の可能性にこだわる石原と、新たな共同性構築のための政治的实践に向かおうとする栗原」のあいだに「可能性」を読み込もうとしている。川口は栗原を「世界人類」と原爆被爆者とを架橋せんとする「霊媒師」であるとしたうえで、その詩編のアドレスが「本当に死者に向けられたものなのか」と問うている。⁽⁸⁵⁾

この川口の問いは大澤が『夢よりも深い覚醒へ——三・一一後の哲学』の末尾で書いた「三・一一の津波や原発事故のような破局的な出来事は、われわれの倫理の最終的な無根拠性を、倫理の仮構性を抗いようもなく示してしまうということ。このとき、われわれは、どうやってなお選択をなしているのか？これが妥当である、これが適切であると納得がいくような社会的な決定をどのようにもたらしたらよいのか？」という「倫理の発動を完全に無効化する破局を前にした時の他者との「連帯」の可能性」と重ね合わせるものである。

二〇一九年の原爆文学・原発表象をめぐる「修辭的な現在」の解説は、この川口のかつての問いを大澤と吉本の問いに重ね合わせることで、「爆心地の黒焦げの死者の傍らで倫理的な尊厳と代理の言葉を説く」ことから「倫理」の発動を完全に無効化する破局を前にして行われる他者との「連帯」の可能性へとつなげることで、そこから始まらなければならない。それがすなわち「吉本

と「原爆文学」との「空隙」を埋めること」である。

さらにその試みは、栗原貞子の原爆「詩」を、戦後詩の「死者」の表象、あるいは吉本の詩篇や詩論と合わせ読むという試みとも並行して進められなければならない。おそらく、戦後詩批評や吉本理論の基準では、「倫理」「正義」が前面に押し出され、抒情や韻律、「喩」の多層性を剥ぎとられた栗原の作品は「詩」とすら認められないだろう（吉本の用語でいえば「意味的な喩」のいわば極限とでもいおうか）。では、栗原の作品を「詩」ではないとみなす基準とは何であるのか、その問いを問い直すことは「反核運動」の「倫理」と「文学」の相克、あるいはこれまでの「原爆文学」論争にも跳ね返る巨大な問いかけとなりうるであろう。そうした原爆「詩」の解説による問い直しの試みは栗原の「詩」を「聖典」としないためにも、また戦後詩の「死者」の表象が極限的な破局に拮抗し得る強度を持つものだったのかを再考するためにも必要なことである⁽⁸⁷⁾。

というのは、一見散文的なアジテーションのようにみえる栗原の「詩」は、岩成達也『中型製氷機についての連続するメモ』について平出隆が述べる言葉を借りれば、「可触性や韻律を極度に排されて、徹底して記述の言葉となる」「詩句を、いわゆる「韻文」から遠ざける」「もとも荒れた場所」に成立する、いわば「全的排除の果てによりやく立ち上ってくるかすかな名づけえぬものの生起」に読む者を関わらせることを可能とする「最初の韻文」「最後という観念を剥奪された詩の死後の歌」であったのかもしれないからである⁽⁸⁸⁾。

大澤の議論から引き出すことのできる論点は実はもう一つ存在

する。それは「ムトゼルマン」は死体ではない「こと、つまり「被爆者表象は死体だけでなくサブパイバト表象の問題でもあるということ」である。田中純が松重美人の一九四五年八月六日に被爆者を撮影した写真を論じた論「イメーজのパラタクシス」の注五四の中で、松重の写真をNHKスベシャル『きこの雲の下で何が起きていたか』二〇一五年八月六日放送）がCG化した時に赤ん坊の死体を抱いた女性が動き出したその瞬間に田中が「戦慄を覚えた」と述べている⁽⁸⁹⁾。ここから連想されることは、被爆者やアウシュビッツの「証言の不可能性」というのは単に「死人に口なし」ということを意味しているのではないということである。原爆表象・アウシュビッツ表象の核心は死体とムトゼルマンがサブパイバトの記憶の中でいわば「像」として同時に動き続ける、しかしその核心の部分は決して表象されぬままに残り続けるということである。これは戦後詩における「死」と「死の表象」とのずれという問いを、最も極限的なかたちで示したものであるだろう。サブパイバトは、この問いをまさに「修辭的な現在」として自らの身体において生き続けなければならないのである。

この論点を、本稿での論の流れの中でもう少し具体化するために——つまり「ムーゼルマン」の傍らにおける「倫理」と「連帯」は「喩」として表象可能か」という問いとつなげるために——、前号の『原爆文学研究』で述べた原爆写真とその解釈についての議論をもう一度再説する。

田中純は、一九四五年八月六日、すなわち広島への原爆投下の当日に松重美人によつて撮影された最初の原爆写真に、アドルノがヘルダーリンのテキストに触れて言うところの、「パラタクシ

ス」——「画面全体の統一が解体されて、各要素が並列的に振動しているような」「言語表現の統語論的綜合や階層的秩序を宙吊りにする「中絶としての並列」——を読み取っている。⁽⁹⁰⁾

意識的構成としてのモニター・ジュに先行して、まず、イメージ内部のパラタクシスが露呈するのである。そのとき、イメージのあらゆる細部が意味作用を始める。⁽⁹¹⁾

それは客観的に共有される視聴覚その他の情報を加算して得られるスペクタクル的な再現ではなく、過去へと向けられた想像力と身体感覚が極度に張り詰めた状況下で偶発的につかの間経験されるような、ある強度との遭遇である。⁽⁹²⁾

原爆写真が表象する「パラタクシス」は、「想像する主体の安定性を破壊」⁽⁹³⁾しうるものである。「各要素が並列的に振動」し「イメージのあらゆる細部が意味作用を始める」ことで物語が作動しなくなり、さらに、ここでは吉本の言う「意味的な喩」と「像的な喩」が分離できずすべてが「意味||像的な喩」（現実の再現からも死者の代行からも逸脱するもの）⁽⁹⁴⁾としてしか認識できなくなる。その「意味||像的な喩」が「黒こげの死体」の傍らで永遠に「並列的に振動」し続ける状況（まさしく生きられる「修辭的な現在」）、それがサバイバーの記憶の表象である。そしてこの「パラタクシス」は、アドルノがヘルダーリンの「詩」から読み取ったもの、つまり、レトリックとメタファーが解体寸前にまで追い込まれた「場所」、平出の言う「もつとも荒れた場所」に成り立

つ「狂気の詩学」である。

この「パラタクシス」という「狂気の詩学」を、栗原の「詩」の「荒れた場所」の「最初の韻文」の嘗為と重ね、さらには吉本らの戦後詩の実作と批評とに接続していくこと、そうすること、吉本が追い求めていた、「未生」の声、「死者の声」を聞き取りそれらの声を「形象として出現」させるための「死後と未生以前を往還することを可能にする」視線を、三・一一以後の今日の表象の問題に接続するものとして浮き彫りにすることができるはずである。そうすることで、田中純が松重の原爆写真とアウシュビッツの四枚の写真に触れて言う「あらゆる要素が彼方を目指して震える粒子状の運動」に向けた、「歴史の眼」、その「眼差しの応答という責任」を引き受けられることが可能となるだろう⁽⁹⁵⁾。そのときこそ、吉本の「論理」と栗原の「倫理」が正当に出会い、「吉本と原爆文学との「空隙」を埋めること」が可能になるであろうと思われる。

※ 本稿はJSPS科研費 19H04422 「原爆報道」に関する基礎的研究（研究代表者 小池聖一）の助成を受けた研究成果の一部である。

注

- 1 鮎川信夫・吉本隆明「崩壊の検証——「反核」をめぐる（戦後）理念の終焉——」（『現代詩手帖』一九八二・八 三九頁）。
- 2 鮎川信夫・吉本隆明前掲「崩壊の検証」四三頁。
- 3 鮎川信夫・吉本隆明前掲「崩壊の検証」四三頁。

- 4 鮎川信夫・吉本隆明前掲「崩壊の検証」四三頁。
- 5 若尾祐司・木戸衛一編『核開発時代の遺産…未来責任を問う』（昭和堂 二〇一七）竹本真希子『ドイツの平和主義と平和運動…ヴァイマル共和国期から一九八〇年代まで』（法律文化社 二〇一七）、ヨアヒム・ラートカウ『ドイツ反原発運動小史』（みすず書房 二〇一一）。
- 6 竹本真希子「一九八〇年代初頭の反核平和運動」（前掲若尾祐司・木戸衛一編『核開発時代の遺産…未来責任を問う』昭和堂 二〇一七）。「社会新報」ヨーロッパ反核取材班『生き残る ヨーロッパ反核の潮』（労働教育センター 一九八二）。
- 7 吉本隆明「ポーランドへの寄与」（初出『中央公論』一九八二・三その後『「反核」異論』所収 引用は『吉本隆明全集 一九』晶文社 二〇一九 二四六―二五六頁）。J・スタニシキス著『ポーランド社会の弁証法』（岩波書店 一九八二）、工藤幸雄・筑紫哲也『ポーランドの道 社会主義・虚偽から真実へ』（サイマル出版会 一九八一）などが吉本の参照した文献である。ポーランド「連帯」のその後を「法」の視点から論じたものとして小森田秋夫「体制転換と法ポーランドの道の検証」（有信堂高文社 二〇〇八）。
- 8 岸俊光『核武装と知識人』（勁草書房 二〇一九）には、進歩派とみなされていた清水が戦前に戦争を礼賛する記事を書いていたこと、内閣官房調査室の志垣民郎が知識人調査の過程で清水の言論の変節を知り、清水を酷評していたことが述べられている。
- 9 清水幾太郎「西独反核集會に参加して」（『祖国と青年』五六号 一九八二・二）一八頁。
- 10 『祖国と青年』五八号（一九八二・五）。
- 11 近藤和子・福田誠之郎編『ヨーロッパ反核七九―八二…生きるための選択』（野草社 一九八二）。また森瀧への言及を含んだ前述「社会新報」ヨーロッパ反核取材班『生き残る ヨーロッパ反核の潮』（労働教育センター 一九八二）。
- 12 ちなみに、八〇年代前半の『祖国と青年』では江藤淳、清水幾太郎、村松剛、小堀桂一郎といった保守論壇の重鎮が論陣を張っていたが、二〇一〇年代の後半ではそれが半井小絵やKAZUYAに代わり、「すずきよしみつ」（この人物は同誌で「サブカルチャーと日本」という特集記事を書いていた「鈴木由充」と同一人物であると思われる）署名による『宇宙戦艦ヤマト』を稚拙に模倣したマンガにより、「改憲波動砲発射」（一）と改憲へのカウントダウンがなされるようになっており、この変化はこの四〇年間の日本の言論空間の劣化を如実に物語って居よう。
- 13 たとえば蓮実重彦と磯田光一の対談「不可避性の世界了解の彼方に」（『現代詩手帖』一九八六年十二月臨時増刊号 引用は蓮実重彦『饗宴Ⅰ』日本文芸社 一九九〇 三七五―三七六頁）この対談は、吉本の論戦戦略に対し「マス・イメージの支配が国家なみになった」から「（二）地図論」など目次の表記が「全部漢字の三字で一貫している」（これは『共同幻想論』のテーマ設定と同じ）（磯田 三六二頁）になることへの指摘など多くの優れた指摘を行っているが、この直前の総選挙で自民党が三〇四議席を獲得したことを「二七物として見て、三百四議席をもっと面白くさせる」「憲法改悪につながる」となるというような話は政治でもなければ文学でもない（蓮実 三七七頁）とする両者の発言は、この時代においては一定の言論としての効果を持っていたと見なしうるものの、憲法改正を現政権

が喫緊の課題として提出する現在の視点から見れば政治的に最悪な帰結をもたらす一切の社会的実践を放棄した「冷笑系」の原型とみなされても仕方があるまい。それは磯田が評価する「保守リベラリズム」(三七四頁)がその後「ネトウヨ」と共振する「ネオリベ」に変化していく、その兆しがすでにこの当時の『祖国と青年』などに出ていることを磯田と蓮実が(そして吉本が)見誤っているということでもある。

14 吉本隆明「あとがき」(『マス・イメージ論』所収 引用は『吉本隆明全集 一九』晶文社 二〇一九 二二一頁)。

15 吉本隆明「修辭的な現在」(『戦後詩史論』大和書房 一九七八)。

この概念への違和感を表明した北川透・瀬尾育生・城戸朱理「歴史を貫く詩の原理」(現代詩手帖特集版『戦後六〇年(詩と批評)総展望』思潮社 二〇〇五)、また二〇〇五年の段階から振り返ってこの概念の「不可避」さ、「政治的理念とか経験の共同性とか戦争体験とか、そういうところからくる超越的な感覚というものとは別のところから、「私」に回収されないもの、個体に回収されないものを探ろうとするのが吉本さんの仕事だった」(三〇九頁)という認識を示した瀬尾育生・稲川方人『詩的間伐 対話二〇〇二—二〇〇九』(思潮社 二〇〇九)を参照。

16 吉本の「自己表出」という概念がそもそも「歴史的累積である共同幻想性の関数」(三浦雅士『私という現象』冬樹社 一九八二)「幻想の共同性」とその積み重ねの表出」(神山陸美『吉本隆明論考』思潮社 一九八八)「自分から出てきている表現は、自分を越えたものの表現になっている」瀬尾育生・稲川方人『詩的間伐 対話二〇〇二—二〇〇九』(思潮社 二〇〇九)という問題意識から構

築されており、吉本は「表現的時間」(『言語にとつて美とは何か』という観点から「自己表出」を考えているので、これはいわゆる「内面」「告白」とは全く異なる機能的概念である。神山は前掲書の中で自己表出と指示表出をマルクスの価値形態論と関連付けて読む必要性を提出している。また、合田正人は吉本を田辺元との比較を通じて「縫目」=テクスチャーの思想家であるとしている。合田正人『吉本隆明と柄谷行人』(PHP新書 二〇一一 七一頁)。

17 鮎川信夫・吉本隆明前掲「崩壊の検証」五〇頁。鮎川の晩年の社会批評としては『最後のコラム——鮎川信夫遺稿集一〇三篇(一九七九—一九八六)』(文芸春秋 一九八七)『疑似現実の神話はがし』(思潮社 一九八五)。

18 鮎川の詩の二一世紀における意義と限界については、酒井直樹と坪井秀人の対話「複数の「戦後」へと働きかける思考へ」(『現代詩手帖』二〇〇一・一一)での「鮎川の亡き後、湾岸戦争が起こり、いわば鮎川が一貫してやってきたような詩と政治のパラダイムをとらえる論理を反復することが無効になってしまった」(七九頁)という坪井の重要な指摘がある。

19 鮎川信夫・吉本隆明前掲「崩壊の検証」五〇頁。

20 鮎川信夫・吉本隆明前掲「崩壊の検証」五〇頁。鮎川の「原罪」に対する問題意識については田口麻奈『空白』の根底 鮎川信夫と日本戦後詩』(思潮社 二〇一九 一三七頁)。

21 吉本隆明「これから人類は危ない橋をとぼとぼ渡っていくことになる」(聞き手大日方公男 二〇一一年四月二二日 『思想としての三・一一』河出書房新社 二〇一一 三九頁)。

22 瀬尾育生『吉本隆明からはじまる』(思潮社 二〇一九 三五四—

三五五頁)。

- 23 吉本隆明『状況への発言』(『試行』六八号 一九八九)。無論、大前の著作に関しては、彼がいわゆる原子力産業(原子カムラ)の一員であったことを留意する必要がある。また、加藤が、そして磯田が言うように、吉本の「情況への発言」での挑発的な文体は、「じつは最初は厳密な書き方で書かれ、その後、乱暴な口調に書き崩されている」(加藤典洋『人類が永遠に続くのではないとしたら』(新潮社 二〇一四 二三七頁)。「下町のアンちゃん」の啖呵を、戦後民主主義の真ん中でやると、さぞやユーモラスな効果を持つだろう」という、同化作用と異化作用まで計算に入った文体」(蓮実重彦・磯田光一「不可避性の世界了解の彼方に」(『現代詩手帖』一九八六年十二月臨時増刊号 引用は蓮実重彦『饗宴Ⅰ』日本文芸社 一九九〇 三四四頁)であることを考慮する必要がある。

24 これについて、加藤典洋はこの吉本の論での五つの反原発に反対する論拠を検証したうえで「一から三と五の論点は彼の『自然史的過程』の理論——一度産み出した科学理論は後戻りさせられない——において妥当だとしながらも四の『原発は安全だ』という点に関しては『この一点の判断で、吉本が誤り、また私が誤ったということである』としている。加藤典洋『人類が永遠に続くのではないとしたら』(新潮社 二〇一四 二三九頁)。

- 25 これは加藤典洋『敗戦後論』のチームに由来するものである。瀬尾育生『吉本隆明からはじまる』(思潮社 二〇一九 三六五頁)。
26 瀬尾育生『吉本隆明からはじまる』(思潮社 二〇一九 三四四—三四五頁)。

27 「未来の他者への配慮」という観点から三・一一以後の「責任」の

問題を問い直そうとした試みとして大澤真幸『夢よりも深い覚醒へ——三・一一後の哲学』(岩波新書 二〇一二)、また吉本の「自然史的過程」の定義を中沢新一の議論を参照して多層的に読み替えようとしたものとして加藤典洋『人類が永遠に続くのではないとしたら』(新潮社 二〇一四)。吉本の「自然史的過程」の再検証と小林秀雄の「原子核エネルギー」への着眼の重要性を論じたものとして神山睦美『希望のエートス 三・一一以後』(思潮社 二〇一三)。

- 28 吉本隆明「『反核』運動の思想批判 番外」(『反核』異論)所収引用は『吉本隆明全集 一九』晶文社 二〇一九 三二一頁)。なお吉本に対する反核・反原発運動サイドからの激烈な反論としては土井淑平『反核・反原発・エコロジー 吉本隆明の政治思想批判』(批評社 一九八六)。

29 福島とチェルノブイリの原発事故をめぐる評価についてはアーニー・ガンダーセン『福島第一原発 展望と真相』(集英社新書)、アラ・ヤロシンスカヤ『チェルノブイリ極秘 隠された事故報告』(平凡社 一九九四)、『調査報告 チェルノブイリ被害の全貌』(岩波書店 二〇一三)。

- 30 こうした原発をめぐる政治的問題について、添田孝史『原発と大津波 警告を葬った人々』(岩波新書 二〇一四)、本間龍『原発とロバガンダ』(岩波新書 二〇一六)、有馬哲夫『原発と原爆 「日・米・英」核武装の暗闘』(文春新書 二〇一二)。なお、同様の観点からの批判を前述の土井淑平本も行っている。
31 吉本隆明『高村光太郎』(『吉本隆明全集五』晶文社 二〇一四 一一八頁)。

32 吉本隆明「停滞論」(『『反核』異論』所収 引用は『吉本隆明全集

- 一九 晶文社 二〇一九 三一一—三二頁)。なお、吉本がここで「わたしたち」という人稱を使っていることには注意が必要である。
- 33 瀬尾育生『吉本隆明からはじまる』(思潮社 二〇一九 三一九頁)。
- 34 鮎川信夫・吉本隆明前掲「崩壊の検証」五二頁。
- 35 三島由紀夫「天に代わりて」(初出『言論人』一九六八・七 『決版三島由紀夫全集』四〇 三一—三五頁)。
- 36 『文化防衛論』(初出『中央公論』一九六八・七『決定版三島由紀夫全集』三七 三三一—三四頁)。
- 37 「ファシストか革命家か」(初出『映画芸術』一九六八・一 『決定版三島由紀夫全集』三九 七—四六頁)。
- 38 この点についてより詳しくは、拙著『三島由紀夫研究』(創言社 二〇一〇)、拙稿「世界内戦」の時代の『文化防衛論』(有元伸子・久保田裕子『二一世紀の三島由紀夫』翰林書房 二〇一五) 参照。
- 39 三島・吉本・鮎川がほぼ同世代であり、三人とも戦後社会への批判者として登場したことからも彼らの問題設定が類似してくるのは当然であると言える。菅谷規矩雄が戦後派の詩人に触れて言う「死すべくしてなお生還した兵士たちが、「メシを食ったりシャツを着たり」することの自明さをあらためておのが身に追わねばならない、そのパラドクスの底のふかさ」(菅谷規矩雄「芹沢俊介と戦後詩批評」芹沢俊介『戦後詩人論』解説 たざわ書房 一九八二 二二三頁)は、三島にも当てはまるものである。そして年を追うごとに「世代」「成熟」「古い」という問いが彼らのパラドクスをさらに先鋭化させることになるのであり、一九七〇年に三島が自死を選び、一九八〇年前後に芹沢、菅谷、神山らによって現代詩が「成熟」という主題で論じられるようになるのはけだし必然であったと言える。
- さらにこの問いを江藤淳『成熟と喪失』(河出書房新社 一九六七)の戦後史版として再解釈することも可能なはずである。
- 40 鮎川信夫・吉本隆明前掲「崩壊の検証」四四頁。
- 41 この年(一九六八年)に、入沢康夫が『詩の構造』についての覚え書(思潮社)を、黒田喜夫が『詩と反詩』(勁草書房)を出し(黒田は『彼岸と主体』(河出書房新社 一九七二)で吉本の『共同幻想論』を執拗に批判した詩人である)、そして吉本隆明をはじめとする批評家が相次いで一種の共同体論として宮沢賢治を論じたことも考慮に入れなければならない(吉本隆明『共同幻想論』河出書房新社 一九六八 天沢退二郎『宮沢賢治の彼方へ』思潮社 一九六八など)。また、菅谷規矩雄は天沢退二郎『作品行為論を求めて』(田畑書店 一九七〇)を通じて宮沢賢治と深沢七郎を結び付ける興味深い読解を行っている。菅谷規矩雄『宮沢賢治序説』(大和選書 一九八五)。
- 42 三島は核戦争と情報化社会が人間精神と文学及び天皇制に与える影響を正確につかんでいた。この点について拙著『三島由紀夫研究』(創言社 二〇一〇)。
- 43 三浦雅士『死の視線 八〇年代文学の断面』(福武書店 一九八八 二六六頁、二六八頁)。
- 44 こうした三浦、神山の詳細な読解と比べた時、「世界視線」を「ただの比喩」と一蹴した柄谷行人の読解(柄谷行人・蓮実重彦『闘争のエチカ』河出書房新社 一九八八)は完全に的外れなものであることが明白である。むしろ、柄谷のその後の「エホバ」「スピノザ的無限」(『探求Ⅱ』)への着目と吉本の「世界視線」の練り上げとを接続させて考えていくべきだろう。

- 45 三浦雅士『死の視線 八〇年代文学の断面』（福武書店 一九八八
二七二頁）。
- 46 三浦雅士『死の視線 八〇年代文学の断面』（福武書店 一九八八
二七四頁）。吉本は柳田の文体は「内視鏡の眼」と「外視鏡の眼」
のあいだの「空隙」の存在を喚起するものと述べている。「柳
田国男論集成」（JICC書房 一九九〇 一一頁）。柳田の「現幽
二つの世界」の「接触」、「靈魂の去来が完全に自由」という考えを
示したのとして「先祖の話」（『定本 柳田国男集』第一〇巻筑摩
書房 一九六二）、この論が一九四五年四月に書かれたことに注目
する柄谷行人「柳田国男試論」（『柳田国男論』インスクリプト 二
〇一三 初出は一九七四）、柳田の発想に「来歴否認者」「ロマン主
義」と「社会政策的思考」の二重性を見る大塚英志『殺生と戦争の
民俗学 柳田国男と千葉徳爾』（角川選書 二〇一七）。
- 47 吉本隆明「ファクション」（『重層的な非決定へ』大和書房 一
九八五）。なお、この論では三島由紀夫のミリタリーブックへの言
及がある。
- 48 神山睦美『吉本隆明論考』（思潮社 一九八八 八〇頁、二三七—
二三九頁）。
- 49 吉増剛造「死人」には「死人は未来です」という恐るべき詩句が
ある。引用は『現代詩文庫四一 吉増剛造詩集』（思潮社 一九七
一）。この点について同書解説北川透「異貌の旅」。吉増の「死人」
と岩成の「死体」の差異について北川透「精巧なる空車」（『詩的火
線』思潮社 一九七九 一四二頁）。
- 50 拙稿「平滑空間」に浮かび上がる「いまだ生まれていないもの」
の声——三・一一以後の原爆文学と原発表象をめぐる理論的覚書そ
の2——」（『原爆文学研究』一一二 二〇一三・一一）。
- 51 拙稿「平滑空間」に浮かび上がる「いまだ生まれていないもの」
の声——三・一一以後の原爆文学と原発表象をめぐる理論的覚書そ
の2——」（『原爆文学研究』一一二 二〇一三・一一）。
- 52 吉本前掲「これから人類は危ない橋をとぼとぼ渡っていくことに
なる」（聞き手大日方公男 二〇一一年四月二二日 『思想として
の三・一一』河出書房新社 二〇一一）。
- 53 拙稿「八〇年代以降の現代文学と批評を巡る若干の諸問題につい
て——三島由紀夫と小林秀雄の亡霊に立ち向かうために——」（西
田谷洋編『文学研究から現代日本の批評を考える——批評・小説・
ポップカルチャーをめぐる——』（ひつじ書房 二〇一七）。
- 54 吉本隆明「解体論」（『マス・イメージ論』 引用は『吉本隆明全
集』一九巻 二〇一九 晶文社 一三二頁）。ここで言及されてい
るのは大江『雨の木』の「暗喩」を論じた箇所である。三浦の著
書での言及は『死者の視線』二七一頁。
- 55 菅谷規矩雄「悲歌に近づく・続」『詩とメタファ』（思潮社 一九
八三 六六頁）。
- 56 菅谷規矩雄「悲歌に近づく・続」『詩とメタファ』（思潮社 一九
八三 六六頁）。
- 57 菅谷規矩雄「悲歌に近づく・続」『詩とメタファ』（思潮社 一九
八三 六八頁）。
- 58 また菅谷はこうした詩のモチーフが当時の吉本が行っていた「南
島論、新訳書批判、親鸞論」の主題に接続しているとする。菅谷規
矩雄「悲歌に近づく・続」『詩とメタファ』（思潮社 一九八三 七
四頁）。

59 長崎の近現代詩については山田かん『長崎県の現代詩史』（長崎新聞社 二〇〇七）。

60 戦後詩の「死者」の像、もしくは「死者」を語る話者がしばしば「女性」として表象されていることには注意を施す必要がある。例えば、岩成の『レオナルドの船に関する断片補足』の話者は「あたし」であり、吉本が安保闘争の時期に書いた詩編「時のなかの死」など）での「死者」は（権美智子を連想させる）「少女」である。

そして、鮎川の詩の「死者」はしばしば鮎川の「夭折した亡姉」という（設定）によって表象されている。鮎川の「亡姉」表象と「死者」表象との複雑な関係については、瀬尾育生『鮎川信夫論』（思潮社 一九八一）、瀬尾の仕事をも批判的に読解し「鮎川が言葉の表側の層にある意味連関の裏側に、詩の歴史に特化した批評的文脈を構築する詩人であった可能性」（二七六頁）を読む田口麻奈（空白）の根底 鮎川信夫と日本戦後詩（思潮社 二〇一九）。また、八〇年代サブカルチャーにおける（岡田有希子を例とする）女性の「死者」の問題については大塚英志『おたく』の精神史（一九八〇年代論）（講談社 二〇〇四）。

61 北川透「死者の方法」（『幻夜の渇き』思潮社 一九七三）、入沢康夫『死者たちの群がる風景』（河出書房新社 一九八三）、神山睦美『成熟の表情——現代詩人論』（砂子屋書房 一九八一）。

62 北川透「詩の現在・死者の方法」（『幻夜の渇き』思潮社 一九七三）。

63 神山睦美『成熟の表情——現代詩人論』（砂子屋書房 一九八一—一五五頁）。

64 神山睦美『成熟の表情——現代詩人論』（砂子屋書房 一九八一—

一五六頁）。

65 神山睦美『成熟の表情——現代詩人論』（砂子屋書房 一九八一—一六〇—一六一頁）。

66 神山睦美『成熟の表情——現代詩人論』（砂子屋書房 一九八一—一六五頁）。

67 北川透は『現代詩前線一九八〇—一九八三』（小沢書店 一九八四）において、岩成達也の『中型製氷機についての連続するメモ』を「既成回路への最も徹底した疑いを遂行し」「もつとも問題をはらんだ詩集」「現実のその概念や像は」「相互に浸透し相反する関係の、息詰まるような叙述にとつて代わられている」「ことばや意識における飛躍と連想、変換と連繋などの想像的思考の運動のことごとくを、書きつくそうとした（六一頁、六九頁）として評価している。

吉本隆明『固有時との対話』との比較の中で岩成の「他者」「錯乱」の問題を論じた瀬尾育生・稲川方人『詩的問伐 対話二〇〇二—二〇〇九』（思潮社 二〇〇九）も参照。

68 菅谷規矩雄「不在に充ちみちた現在」『詩とメタファ』（思潮社 一九八三—一五八頁）。

69 菅谷規矩雄「討論会「詩はこれでもいいのか」のあとに」『詩とメタファ』（思潮社 一九八三—一三七—一四五頁）。

70 北川透『現代詩前線一九八〇—一九八三』（小沢書店 一九八四）。

71 北川透『荒地論 戦後詩の生成と変容』（思潮社 一九八三）、菅谷規矩雄『詩とメタファ』（思潮社 一九八三）。現在の言語学と文学理論の「比喩」をめぐる諸問題を整理したものととして西田谷洋「タートルという比喩」（『文学＋』二号 二〇二〇 近刊）。

72 「喩」と「倫理」、「仮構性」の関係について、合田正人は「そもそも

も吉本は、「旧約による新約の」「予約」(prefiguration)——「喩」にすぎない旧約が新約において「真意」として実現される——の「仮構性」をめぐって『マチウ書試論』を書いたのだった」という重要な指摘を行っている(合田正人『吉本隆明と柄谷行人』P.H.P新書 二〇一一 一五九頁)。「マチウ書試論」については磯田光一『吉本隆明論』(磯田光一著作集)第二巻 小沢書店 一九九〇)、瀬尾育生「宗教的なものの内破について」(『吉本隆明からはじまる』思潮社 二〇一九 一八九—二一六頁)、『マチウ書試論』で吉本は「ローマ的な秩序」と「ヘブライ聖書」の相克、そして其処から切断された存在としてキリストを描き出し、かつ、そのキリストという(虚構)(吉本の種本は新約聖書を偽書としたドレウスの『キリスト神話』)を中心にして原始キリスト教の権力の生成過程(それを支える「一種のするどい観念的な二元論」)を見ている(引用は『マチウ書試論』『吉本隆明全集四』晶文社 二〇一四 二〇七頁)。

こうした原理的把握を立脚点とし、『言語にとつて美とは何か』『共幻理想論』に結実した吉本の仕事は、「ギリシア的なもの」と「ヘブライ的なもの」の弁証法からヨーロッパのリアリズム文学の生成と変容を論じたアウエルバッハ『ミメーシス』に日本で最も接近した試みととらえることも出来る。この点については、芥川龍之介『神々の微笑』に『オデュッセイア』とキリスト教との相克があるとするダマソ・フェレイロ・ポッセの博士論文(『芥川龍之介における西洋古典の受容——「神神の微笑」と「文芸的な、余りに文芸的な」を中心に——』広島大学大学院文学研究科博士論文 二〇一八)の興味深い指摘をヒントにした時、いわば日本における「未完のミメーシス」の構想を可能にするだろう。この論点については、芥川と同

時代の野上弥生子の『ギリシア・ローマ神話』の翻訳(および田辺元との交流)、吉本の影響下で仕事をした菅谷規矩雄の近代詩のリズム論、さらにはE・サイード「始まりの現象」などの比較検討を通じて稿を改めて論じた。

73 吉本が天草の連作詩篇を書いていたのは一九八〇年前後だが、この当時の中上健次が『千年の愉楽』(一九八二)『地の果て至上の時』(一九八三)という「路地」Ⅱ「悲劇の空間の解体」を表象する作品を書いていたことを考えれば、吉本の言う「修辭的な現在」は、当時の小説とも対応させねばならないだろう。『千年の愉楽』の多層的な「喩」のエクリチュール、「落ちつく先のない多層的な読みをポテンシャルなものとして抱えたまま、すなわち決定不能な読みの多義性に混乱したままで句点に急ぐ」ことを要請するエクリチュールについては、いとうせいこう「愉悅の群読」(『すばる』一九九五・七)を参照。また中上をはじめとする作家の八〇年代の営為と二〇一〇年代と作家の仕事との対応性については、拙稿「八〇年代以降の現代文学と批評を巡る若干の諸問題について——三島由紀夫と小林秀雄の亡霊に立ち向かうために——」(西田谷洋編『文学研究から現代日本の批評を考える——批評・小説・ポップカルチャーをめぐって——』(ひつじ書房 二〇一七))。

74 菅谷規矩雄「課題としての(詩の現在)」「詩とメタファ」(思潮社 一九八三 一四三頁)。

75 吉本は『吉本隆明が語る戦後五五年』「第一〇回 マス・イメージと大衆文化」(談話収録一九九六年二月一五日 インタビューアー山本哲士)の中で『マス・イメージ論』の段階で一番評価していた詩人は荒川洋治だと述べている。同書七頁。この点に関して荒川

洋治の戦後詩批判の戦略が八〇年代以降に空転しているとする野村喜和夫・城戸朱理・福岡健二「討議 荒川洋治」(野村喜和夫・城戸朱理編『討議戦後詩』思潮社 一九九七)。

76 小林秀雄「死体写真或いは死体について」(『作品』一九四九・三十一世紀の小林秀雄)に向けて 近年の研究史を概観しながら「国文学放」二二八・二二九合併号 二〇一六・三。注六〇の指摘に

絡めて言えば、小林が拘泥したドストエフスキーの『白痴』の終結部で表象されているのはナスターシャという「女性の死体」である。

77 山城むつみ「小林秀雄とその戦争の時 『ドストエフスキーの文学』の空白」(新潮社 二〇一四)。

78 島弘之『感想』というジャンル(筑摩書房 一九八九)。

79 一九八〇年代の文学を三島と小林の仕事から逆投射する試みとして拙稿「八〇年代以降の現代文学と批評を巡る若干の諸問題について——三島由紀夫と小林秀雄の亡霊に立ち向かうために——」(西田谷洋編『文学研究から現代日本の批評を考える——批評・小説・ポップカルチャーをめぐる——』(ひつじ書房 二〇一七)。

80 鮎川研究については前掲坪井・酒井対談、瀬尾前掲鮎川論、宮崎真素美『鮎川信夫研究——精神の架橋』(日本図書センター 二〇〇三)、田口麻奈『空白』の根底 鮎川信夫と日本戦後詩(思潮社 二〇一九)。鮎川を「死者の代理人」||「表象Ⅱ代行という戦後詩の制度」の確立者とする視点は野村喜和夫・城戸朱理・瀬尾育生「討議 鮎川信夫」(野村喜和夫・城戸朱理編『討議戦後詩』思潮社 一九九七) なおこの討議は阪神大震災直後に行われている)。

これまでの研究史の整理については田口本の序論参照。

81 酒井直樹「戦後日本における死と詩的言語」(『日本思想という問題』岩波書店 一九九七 二七二―二七三頁)。なお、鮎川の詩における同様の「死者」をめぐる言表行為の複雑さについて瀬尾前掲鮎川論参照。

82 こうした言表行為のずれは容易に埴谷雄高「自同律の不快」を連想させる。戦後詩とはいわば埴谷と小林秀雄の仕事の空白を埋めるものだったという仮説を立てることも出来るだろう。埴谷雄高の仕事を詩論として読み解いたものとして菅谷規矩雄「埴谷雄高論」(『無言の現在 詩の原理あるいは埴谷雄高論』イザラ書房 一九七〇)。

83 この巨大な問いについては、鮎川や藤井貞和の仕事の再検証を通じて改めて論を立てる必要がある。この問いをめぐる予備作業については瀬尾育生・稲川方人『詩的間伐 対話二〇〇二―二〇〇九』(思潮社 二〇〇九)、そして何よりもまず坪井秀人『声の祝祭』(名古屋大学出版会 一九九七)。

84 大澤真幸「夢よりも深い覚醒へ——三・一一後の哲学」(岩波新書の残りのもの——アルシーヴと証人)(月曜社 二〇〇一)。邦訳では「回教徒」という訳語が採用されている。

85 川口隆行『原爆文学という問題領域』(創言社 二〇〇八 二二四―二二七頁)。同書について柳瀬による書評論文である「遂行する憑依あるいは分有される単独——一つの方法的批評の試み——」(『原爆文学研究』第七号 二〇〇八・一二)を参照。

86 大澤真幸「夢よりも深い覚醒へ——三・一一後の哲学」(岩波新書 二〇一二 二四八頁)。

87 この点についてJ・W・トリート『グラウンドゼロを読む』(法政

大学出版会 二〇一〇) 第三章「三つの論争」第五章「詩自身へあらがう詩」。

88 平出隆『白鳥の剥奪』(平出隆『破船の行方』思潮社 一九八二

二九〇頁)。

89 田中純『過去に触れる 歴史経験・写真・サスペンス』(羽鳥書店 二〇一六 二五二三頁 注五四)。

90 前掲田中純『過去に触れる 歴史経験・写真・サスペンス』(羽鳥書店 二〇一六 二六〇頁)。テオドル・W・アドルノ「パラタクシス」(『文学ノート2』みすず書房 二〇〇九)。

91 前掲田中純『過去に触れる 歴史経験・写真・サスペンス』(羽鳥書店 二〇一六 二六〇頁)。

92 前掲田中純『過去に触れる 歴史経験・写真・サスペンス』(羽鳥書店 二〇一六 二六四頁)。

93 前掲田中純『過去に触れる 歴史経験・写真・サスペンス』(羽鳥書店 二〇一六 二六四頁)。

94 合田正人は吉本の『言語にとつて美とは何か』の『言語は、現実世界とわたしたちのあいだで故郷を持たない放浪者に似ている』という一節をもとに、「究極的には、「喩」は「疎外」に、幾重もの「疎外」に起因する。それは何物とも完全には合致することのできない「人間」という存在様態そのもの、「ずれ」なのだ。」「放浪者」という表現はそれを吉本が、垂直的な構図を残しながらも、柄谷のように「横断的なもの」としても捉えていたことを示唆している」と述べている(合田正人『吉本隆明と柄谷行人』PHP新書 二〇一一 一五八―一五九頁)。

95 前掲田中純『過去に触れる 歴史経験・写真・サスペンス』(羽鳥

書店 二〇一六 二六六頁、二六七頁)。